

# 追慕の記

鈴木朝子 — 編集者

『最後の冒険家』 石川直樹



ところでメールのなかでぼくのことを「〇〇様」と呼ぶのを止めてもらえませんか？  
と返信をいただいた。堅苦しいのが嫌だったのだろうし、そういう仲でもないだろうという気持ちでいてくださったのだろうとも思った。相手は仕事の発注元で、個人としてはいつも慕うばかりの20も上の年長者。「いやそう言われましても」と思いながらも従ってみた。「〇〇さん」と呼びかけてみたら、メールで伝えたいことがどんどん増える。恩恵を受けたのはこちらばかりとは思うけれど、互いに楽しいやり取りができることがくすぐったい。そして、すべての年上の知り合いに言えることとして、順番に行けばいつか見送らなくてはいけないのか、と不意に思う。

年の離れた人とつきあうことを通して、人は自分の役割をふだん以上に意識する気がする。例えば若者の時代に、ずっと年上の人と知り合って、仕事でも遊びでも、何か一緒に取り組んだとしたら、若い自分にこそできることを考える。そして、年を重ねないときできないことが何かを思い知る。そうやって互いに敬意を払い合い、必要とし合うことで、人と人は友だちになれる——んじゃないかなと思う。

『最後の冒険家』は、気球に乗って長距離飛行や山越えに挑み続けた神田道夫さんのことを書いたノンフィクションで、神田さんは2008年に消息を絶った。書き手の石川直樹さんは、神田さんが2004年にチャレンジした太平洋横断に同行した。はじめて出会ったとき、神田さんは54歳、石川さんは26歳だった。

熱気球のこと、冒険のこと、とくに二人で挑んだ太平洋横断のことが、正確に、詳細に、丁寧に描かれる。読んでいる最中はただわくわくして、読後に心を揺さぶってきたのは、石川さんから神田さんへの圧倒的な敬意だった。初対面の日に神田さんが何を話したか、そのときどんな様子だったか、冒険者として神田さんの長所はどこで弱点は何か。感情をつとめて抑えた文章に、かえって追慕の情がにじむ。石川さんが、正確に、詳細に、丁寧に描きたかったのは、神田道夫さんという人が生きて証なのだと思う。

気球の技術を一から教えてもらった弟子として、そして生死を共にした年若い一人の友人として。（「はじめに」より）

人が人を描いた——伝えることが自分の役割と認識して書かれた作品のなかで、これほどひたむきで誠実なものをほかに知らない。☐